

何故なしの生…エックハルト神学における生の始原

山崎達也

はじめに

ドイツ・ドミニコ会に属する説教僧、マイスター・エックハルト (Meister Eckhart, ca.1260-1328) の神学思想において、生がいかに捉えられているのかを素描し、その思想が現代においていかなる意味を持つかという問題をあわせて考えることが、小論の意図である。

1. 生の本質的規定

エックハルトは語っている。「君は何故食べるのか」

と問われたならば、「生きるため」と答えるであろう。

また、「君は何故眠るのか」と問われたならば、やはり「生きるため」と答えるであろう。しかし「君は何故生きるのか」と問われたならば、「まったくわからない。しかし私は喜んで生きる」と答えるしかない^①。つまりここには、生きることそれ自体においては、その目的もその理由もないことが提示されている。さらにあるドイツ語説教においてエックハルトは、たとえ生それ自体が「君は何故生きるのか」と千年の間問い続けられたとしても、「私は生きるゆえに生きる」と語る以

外にはないであろうと述べている。その理由をエックハルトは次のように述べている——

「なぜなら、生が自ら固有な根底から生き自らの固有な根底から湧き出でているからである。したがって、生は、生がそれ自身を生きるまさにそこにおいて何故なしに生きているのである。」⁽²⁾

生が本来において何故なしであるのは、生が自らの固有な根底から湧き出でているからである。生が自らの固有な根底を有しているということは、生が生自体の外にその理由をもつてはいないことを意味し、生きるということが内面から自己自身から動かされることを意味している。食べることや眠るという行為は「生きるため」であって、それ自体に理由を有しているわけではない。すなわち、それらの行為は「生きる」という目的を自己自身の外に有している。それに対して、生きることは内からのものであり、いわば内的行為である。エックハルトによれば、そうした内的行為は時間の下においてなされるものではなく、たえず生まれ
ており、何かに妨害されることはない。⁽⁴⁾

内的な始原から動かされることが本来の意味において生きていることを意味するのであれば、その反対に、外部のあるものによって動かされるものは本来の意味において生きているものとは言えない。つまり、自らを動かすものが自分に先立ち、自分の外にあり、あるいは目的を自分の外に有するすべてのものは、本来の意味においては、生きているものとは言えない。⁽⁵⁾ エックハルトによれば、人間を含めた被造物はそのようなものである。⁽⁶⁾

さてここで、以上述べてきたことを要約してみよう。

- ① 生は自己のうちにその始原を有している。
- ② 生きることは、生の自らの固有な根底から湧き出るといふ内的行為である。
- ③ 内的行為としての生は時間の下になされるものではない。

④ 自分の外に何故あるいは目的を有しているすべてのもの、すなわち被造物は本来の意味において生きているものではない。

ここで注目されるべきことは、内的行為としての生

は被造的なものではない、すなわち神によって創造されたものではないということが帰結されることである。そして生が被造的ではないことの根拠は、生が自己のうちには有している始原にある。ここから一つの問題が生じる。すなわち、生の始原とは何か。さらには、内的行為としての生が時間的なものではないにしても、われわれはこの時間的世界に生きているという事実から考えるならば、もう一つの問題が提起されなければならない。すなわち、生の始原はわれわれの现实生活といかなる関係にあるのか。

以下においてこの二つの問題に答えることで、エックハルトにおける生解釈の特質を明らかにしてみよう。まずはエックハルトの聖書解釈から見ていくことにする。

2. 生の聖書神学的基礎付け

エックハルトは『ヨハネ福音書』第一章第三節から四節、すなわち「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずになっただものは何一つなかった。言

の内に命があつた」(Omnia per ipsum facta sunt et sine ipso factum est nihil quod factum est. In ipso vita erat.) を、アウグスティヌス以来の伝統に基づいて以下のように読む——

「万物は言によって成った。言なくしては無が生じた。成ったものは、言のうちにおいては、生命であつた。」(Omnia per ipsum facta sunt et sine ipso factum est nihil. Quod factum est in ipso vita erat.)

世界が神の言葉によって創造された事実に関しては、両者は共通のこととして認識している。しかし後者においては、創造されたものが神の言葉のうちにおいては生命として存在していることが述べられている。エックハルトはさらに『知恵書註解』(Expositio libri Sapientiae)において次のように述べている——

「神によって造られたものはそれ自身において存在を有しているのだが、しかし神のうちにおいては、生命としてあつたのであり、それは神自身が非被造的であると同様に、生命としては非被造的であつたのである。」⁽⁷⁾

エックハルトのこの解釈によれば、神によって創造

されたすべてのものはこの世界において自らの存在を有しながらも、神のうちすなわち神の言葉のうちにおいては非被造的な生命として存在していることになる。ということとは、被造物は二重の存在を有することになる。つまり世界における被造的な存在と神のうちにおける生命としての存在である。ここでこの二重の存在について考察してみたい。

エックハルトは、『創世記註解』(Expositio libri Genesis)において、神の言葉のうちにおける生命としての存在を潜勢的存在(esse virtuale)、世界における被造的な存在を形相的存在(esse formale)と名づけている。潜勢的存在とは確固とした恒常的な存在であり、形相的存在とは外的なものの世界における事物の存在、すなわち事物がその固有の形相において有する存在である。⁽⁸⁾しかし被造物が二重の存在を持っているといっても、二つの別々の異なった存在を持っているわけではない。

神によって創造されたすべての事物は、神の言葉のうちにおける潜勢的存在としてある。すべての事物は神のうちにおいては神の生として神の知性認識として存在し

ている。この存在は事物のいわば理念(ratione)である。この理念にしたがって神は世界の事物を創造する。したがって、被造物における潜勢的存在は、神が創造する以前に神のうちですでに先在していた、神自身の知性認識であり神自身の生なのである。だから、潜勢的存在としての生は非被造的であり、この世界における時間性を超越した永遠なる存在にほかならない。

以上において明らかになったことは、エックハルトは『ヨハネ福音書』第一章第四節の聖句に基づいて、神によって創造された事物は、この時間的世界において形相と質料との複合的存在者として存在しているが、創造以前においては神の言葉のうちにおいて神の生命として存在していたと解釈しているということである。ところで神の言葉は、三位一体論からみれば、ペルソナとしての子(Filius)を意味する。つまり、子は父から發出し、そして父と子から聖霊が發出する。したがって、生の始原が神の言葉であるということの意味は、神の存在内部における發出関係を考察することによって、いっそう明らかになると思われる。

3. 生命としての神的存在

神に直接向かってその名を問うたモーセに対し、神自身が答えた名は「わたしはある。わたしはあるという者だ」(ego sum qui sum)⁽⁹⁾であった。中世の神学者と哲学者はこの神名に、神における存在と本質の同一性を読み取った。しかしエックハルトはその同一性を承認しながらも、この神名における「(私は) ある」(sum)が二回言われている反復に注目している。エックハルトによれば、この反復は「ある種の沸騰ないしは自己自身を生み出すこと」(quaedam bullitio sive parturitio sui)⁽¹⁰⁾を表示している。この沸騰とは、自己自身のうちにおいて沸騰することであり、それは自己自身へと沸き立つことである⁽¹¹⁾。こうした沸騰が神の生命であるとエックハルトは理解する⁽¹²⁾。

トマス・アクィナス (Thomas de Aquino, ca. 1225-74) のテーゼ「神は存在それ自体である」(Deus est Esse Ipsum)⁽¹³⁾をエックハルトは承認しただけではなかった。彼は、神の存在を湧出し、流れ出る生命と把握することで、

神の存在の意味をより深く理解することに成功したのである。

すべての事物の第一原因 (causa prima) としての神は⁽¹⁴⁾、すべての事物のそしてすべての事物にとって「何故」であるがゆえに、神自身はいかなる「何故」をもたない⁽¹⁵⁾。エックハルトは、こうした神的存在の内部構造を力動する生命それ自体として理解することで、生が本来において「何故なし」であることの根拠を明らかにしたのである。

さらにエックハルトは、『二十四人の哲学者の書』(Liber xxiv Philosophorum) から「神とは自らの光輝を自己に還帰させつつ、一性を産む一性である」⁽¹⁶⁾という一つのテーゼを取り出し、それを神学的に解釈することによって、神の根源的な三一構造のもつ力動性と創造的霊のもつ生命力を明るみに出す。

すなわち一性はけっして生まれることはない父性と解され、その一性が産む一性とは父が自己自身として産んだ子であり、光輝とは父と子との愛の絆としての聖霊と解される。神の三一性の光は、被造物の産出の

原像 (exemplar) すなわち理念として、自然的、道徳的、人工的な働ききすべてに輝いている。⁽¹⁷⁾ 原像は、神の最内奥からの発出として、父性の心胸から産まれ出る子・永遠なるロゴスであり、そして原像は、外へ噴出 (eulitio) する前におけるすなわち被造物が産出される以前における、自己自身において自ら膨れ上がり沸騰 (bullitio) する生命である。エックハルトは、神の啓示によって明らかにされた神の存在それ自体への洞察を通して開示される、沸騰と噴出との緊張関係のなかから、神性におけるペルソナの発出が創造の根拠であるとの帰結を導く。⁽¹⁸⁾ すなわち神は善であるかぎり、噴出の根源であり、しかしペルソナの発出という観点からみれば、神は噴出の原像・原因として関係する沸騰の根拠なのである。⁽¹⁹⁾

4. 「恩寵のための恩寵」としての受肉

ペルソナの発出 (processus) と創造 (creatio) におけるこうした関係性に基づいてエックハルトは、受肉 (incarnatio) を神のペルソナの発出と創造の中間的なも

のとして位置づける。つまり受肉は両者の本性を帯びていることになる。したがって、受肉そのものは永遠なる流出 (emanatio) の模倣であり、下級なる自然全体の範型であることが帰結される。⁽²⁰⁾ これがエックハルトによる受肉の形而上学的解釈である。こうした解釈が、われわれ人間の生にとつて、いかなる意義があるのか、この問いを以下において考えてみたい。

まずは聖句「神は、独り子を世にお遣わしになりました」(ヨハネ、四・九) についてのエックハルトの説教から見よう。

「この聖句を君たちは、神の独り子がわたしたちと、いっしょに食べたり飲んだりするというように、外的世界の観点から理解してはならない。君たちは内的世界に関わることとして理解しなければならぬ。⁽²¹⁾」

では、この内的世界とは何か。エックハルトは続けて述べる――

「父が自らの単純なる本性において自らの子を本性的に生むことが真実であるように、神は自らの子

を精神の最内奥に生むことも真実なのであって、これが内的世界である。⁽²²⁾

しかしさらにわれわれは問いたい、精神の最内奥とはどこなのか。エックハルトは「根底」(Grund)と言う。しかし続けて彼は語る――

「ここでは神の根底は私の根底であり、私の根底は神の根底である。⁽²³⁾」

この一節は、エックハルトが神と人間との神秘的一性を語る代表的フレーズとして、これまで頻繁に採り上げられてきた。ここで言われている「ここ」とは、これまでの文脈から判断して、「精神の最内奥」であり、そこは「神の根底」であり、「私の根底」であるというふうに、一応は理解できる。そして「根底」は神と私とが一である場を意味するものとして理解できる。しかしその「根底」が神のものと私のものとしてわざわざ別々に表示されているのはどうしてであろうか。しかも初めの文では「神の根底」が主語となり、続いての文では「私の根底」が主語となっている。エックハルトはどうしてこのように言い換えを行ったのだろうか

か。「根底」が神と私との合一する場として考えられているだけであれば、初めの文すなわち「神の根底は私の根底」と述べるだけで十分ではないだろうか。要するに、神と人間とが「根底」において融合するというようなイメージがエックハルトの語る一性であるならば、「根底」を「神の」と「私の」という別々の所有格を用いる必要はないし、主語を言い換える必要もなかったはずである。つまり神と人間との共通の存在基盤として「根底」を捉え、そこで両者が合一するイメージとして「一性」と理解することは誤解を招くのではないかと思われる。そこでわれわれは改めて問いたい、ここで語られている一性とはどのようなものなのか。解決のヒントは右の一節に続いて述べるエックハルトの言葉にある。

「ここでは神が自らの固有なるものから生きるように、私は私の固有なるものから生きる⁽²⁴⁾」

「ここ」すなわち精神の最内奥において、私は私の固有なるものから生きる。それは、神が固有なるものから生きる仕方と同一であることを意味している。こ

こにおいては、神と私との区別はないように思われる。それでは、神の固有性とは何か。ドイツ語説教第二九においては次のように述べられている。

「比類なきものであり、誰にも等しくはないことが神の固有性であり、神の本性である。」⁽²⁵⁾

神に等しいものあるいは類似しているものは何一つない。なぜなら、たとえば二つの事物が等しいあるいは類似していると言われるのは、両者が種あるいは種を超えているからである。⁽²⁶⁾その超越的性格によって、かえって神は存在それ自体として被造物の本質よりも内奥に滑り込めるのである。だから、神と被造物の間にはいかなる関係も類似性も見出すことはできない。そうだとすると、私が私の固有なるものから生きるといふことは、神が比類なきものとして生きるように、私がいかなる他者にも似ることなく生きるといふことではないのか。換言すれば、いかなる他者にも似ていないことが、神に似ていることを意味する。したがって、「根底」は神と私との合一が可能になる共通の場ではな

く、「私の根底」とはそこにはただ私のみしかいない根底であり、「神の根底」とはそこにはただ神のみしかいない根底という意味になるだろう。つまり、私が本来の私として生きることが神と同様の生き方なのであって、その「生きる」の本来のあり方において一致すること、それが神との一性を意味するように思われる。⁽²⁷⁾では、その一性にいかにして至ることができるのか。

たとえば事物A事物Bが類似の関係にあるとき、その前提はAとBとが区別されていることである。さらに区別されることの前提条件は、AはAであってBでは《ない》、BはBであってAでは《ない》という否定性が存していることである。したがって、この世界における被造的存在者は自己のうちにこうした否定性を含んでいる。この否定性を有しているかぎり、それは自己と他者を分断する契機としてはたらく、つねに他者と何らかの関係をもつことになる。そうであるかぎり、私は私の固有性から生きるという、比類なき生き方は不可能である。したがって、その生き方が可能になるには、自己のうちにある否定性をさらに否定し

なければならぬ。われわれは《ない》(nihil)から脱却していなければならぬ⁽²⁸⁾。われわれは自らを殺し、完全に死に切り、自分自身において無でなければならぬ⁽²⁹⁾。このように、被造的な《私》を否定し、本来の固有性から生きること、すなわち死を通して本来の生を回復することを可能にするのが、受肉の恩寵にほかならない。

本性的に神の子である言葉の受肉の第一の結実は、エックハルトによれば、われわれ人間が神の養子になることによって、神の子になるということにある⁽³⁰⁾。われわれが神の子になるということは、神自身が自らの子をわれわれの魂の最内奥に生むということにほかならない。しかしこの出産は、たとえば一年に一回起こるといふものではなく、時間を超えて起こる。つまりは、人間の自然本性をも超越し、人間の思惟をも超えている⁽³¹⁾。すなわち魂における神の子の誕生は永遠の出来事なのである。

永遠なる言葉の受肉はしかしながら、エックハルト自身の信仰と理解において中心となった救済の神秘で

あり、彼は受肉を『ヨハネ福音書註解』のなかで、「最高の恩寵」(summa gratia)、「恩寵のための恩寵」(gratia pro gratia)、「恩寵にまさる恩寵」(gratia super gratia)⁽³²⁾と最上級で表現している。エックハルトは、説教と講解のなかでこの救済の神秘をその超時間的意義において、すなわちその起源において、その遂行において、そしてその恩寵の救済論的成就において考察している。この考察方法が、キリストが人となったこの歴史性に、また救済史にとつての十字架上の死の意義に疑問を投げかけることをしないのは言うまでもないことである。

教父たち(とりわけアウグスティヌス)と同様にエックハルトがその解釈に非常に重きを置いた『ヨハネ福音書』のプロローグは、やがてもたらされる救済について啓示している。「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」(ヨハネ、一・一一)。この聖句の深い意味をエックハルトがさまざまに吟味することで明らかにすることができたのは、彼が神学者であったからこそである。この聖句は、新たに吟味することによって、次のようにも解釈することができる――

「すべての存在するもの、すべての一であるもの、すべての真であるものそして善であるものは、存在すること、一であること、真でありそして善であることを、それ自身から有しているわけではなく、——すなわちこれが「民は受け入れなかった」とここで言われている意味であるが——、そうではなく、すべてのものはこのことを言葉それ自身から、すなわち神の子から有している。」⁽³³⁾

さらにエックハルトは『集会の書註解』(Sermones et lectiones super Ecclesiastici c. 24. 23-31)において次のように述べている——

「すべての被造的存在者は、神とのアナログア的關係において存在、真性、善性へと向けられている。したがって、すべての被造的存在者は存在、生そして思惟を、神からかつ神のうちにおいて存在的にかつ根源的に有するのであり、被造的存在者としての自己においてではない。」⁽³⁴⁾

人間は、被造的存在者であるかぎり、自己の内に生の始原を有しているわけではない。したがって、人間

がこの世界において生きるということ自体は、自己の外からすなわち「神から」つねに与えられていることを意味する。しかし人間は、潜勢的存在としては「神のうちにおいて」生の始原を有している。このことが神との一性を思考しうる根拠になるわけであるが、しかしそうは言っても、被造的存在者と神との間には、被造的存在者には超えることのできない虚無が横たわっていることはけっして無視されてはならない。すなわち神は、被造的存在者にとって、《最も外に》存在している。

しかし、生の始原が神から与えられているかぎりにおいて、神は被造的存在者にとって、《最も内奥に》存在している。《最も内奥にして最も外にある》という緊張においては、神はこの世の存在者には予測もできない、自由にもならない深淵なのである。しかしすでに述べたように、人間の歴史が救済史と捉えられることは、恩寵が時間的世界においてはたらいていることを意味している。この意味において、恩寵は深淵からの人間へのはたらきかけとして理解できる。

そのはたらきは人間に対する神の自己犠牲的な愛の証明でもある。イエス・キリストの受肉は神の愛の顕在であり、そしてその愛は十字架上の苦と死という歴史の出来事として結実する。だから、この世界に示された神の生と死は、神の愛という観点なしに理解することは許されない。さらには、われわれ人間の生と死に関する経験的知を基準にして神の生と死を理解することは許されない。キリストの受肉と十字架に示された神の恩寵の秘密が明かされたとき、生と死の神秘ははじめてわれわれ人間に解き明かされる。それでは恩寵の秘密を解く鍵は何か。強き信仰心、これである。エックハルトは語る。すなわち生とは神の子として生まれ生きること、死はこの世界に死に、被造物に対して死ぬことである。⁽³⁵⁾ここに生と死の真の意味が明らかにされる。

さて受肉それ自体が、われわれ人間が神の子になるための恩寵であることは、すでに述べた。その根拠は、恩寵がわれわれ人間の現存在をその根底から貫く神の存在に由来しているからである。⁽³⁶⁾受肉の恩寵は、われ

われ人間に神が自らの存在それ自体を与えるという恩寵を受け取る場として人間本性 (*natura humana*) を新たな地平のもとに開示する。⁽³⁷⁾というのもエックハルトは、神の言葉が受け取ったのは人間の本性であることを承認し、その人間本性を次のように解しているからである——

① 人間としての本性は、われわれすべてにとって、キリストと同名同義的に等しく、共通なものである。⁽³⁸⁾

② 人間本性はすべての人にとって、その人自身よりも、よりいっそう内的なものである。⁽³⁹⁾

第一のテーゼは、人間本性が非被造的であることを意味している。すなわち、エックハルト神学においては、人間本性は被造的な存在としての人間における固有性を表示する肉に対して超越的關係にあると理解されるわけである。この超越性が、エックハルトが《魂における神の子の誕生》を語ることができる根拠にはかならない。すなわち人間本性は、神が自らの独り子を遣わし、そこで自己自身を生む純粹なる魂として把

握される。

人間本性におけるこの純粹性は、神の子を受容する能力の本質である。したがって、人間本性は、創造が現実化する以前から創造されるべきものに帰属している恩寵を享受する本性なのである。

こうした人間本性が、その人自身よりもいっそう内的であると言われるのは、《最内奥にして最も外にある》という、被造的存在者に対する神の存在の仕方に対応している。というのは、神がすべての事物に存在を授与する場が人間本性であるからである。この人間本性は、人間の本質よりもさらに内奥のものである。⁽⁴⁰⁾ というのは、前述したように類と種という存在規定は神には適用されないのだから、創造的能動者としての神は、人間の本質を規定する類と種、質料と形相といった因果関係や関係構造のうちではたらくのではなく、自由なものとして定められ創造されたものが、根源的にして創造的な能動者の影響範囲にのみ存立できるように、現存在の内部へと自由に分け入り、そこではたらくからである。

すべての事物に存在を授与するという神のはたらきが恩寵である以上、その超自然的性格のゆえに、被造的存在者は恩寵の神秘を理解することはできない。こうした恩寵の理解不可能性は、被造的存在者が自らの存在の真の意味とその由来する始原が理解できないことを物語っている。

ここから明らかになることは、この世の存在者は本来の自己自身を見失っていることである。ふだん自己自身と思われている《私》は、被造的存在者が措定した主体であるかぎり、否定されなければならない。エックハルトによれば、純粹な実体を表示する《私》を有しているのは、「私はある」を固有名とする神のみであって、⁽⁴¹⁾ この世界において人間は純粹実体としての《私》を有する資格がない。しかし人間は《私》を使用することなしに生活することはできない。昨日、《彼》と《彼女》の結婚祝いについて《あなた》と相談したのは《私》であるし、いま深煎りの珈琲を飲みながら、バッハのカウンタータに浸るといふ、この世界において唯一と思える至福を味わっているのは、《彼》

でも《あなた》でもなく、まさにこの《私》である。われわれはこの世界に《私》をもつことによって、はじめて他者と向き合うことができる。このように、いわば虚仮なる《私》を措定せざるをえないあり方が、この世界での人間のあり方なのである。⁽⁴²⁾

この世界での《私》に束縛され《私》が欲するものに執着することから解放されるためには、われわれはこの世界に対して死んでいなければならない。しかしこの死は人間自身によってもたらされるものではない。換言すれば、《私》は《私》自身を殺すことはないし、殺すことはできない。なぜなら、《私》は自己の外にあるものをつねに求めている被造的存在者として措定されたのであるから、つまり自己の外に自己の存在根拠を求め続けることが自らの存在理由なのであるから、自己自身の消去はその存在原理からして不可能なことなのである。⁽⁴³⁾したがって、《私》の消去が可能であるならば、それは超越的次元からのものでなければならぬ。⁽⁴⁴⁾

そしてこの死を人間にもたらすのが恩寵にほかなら

ない。すなわち恩寵は人間に《私》を否定させ、自らの十字架を負わせることで、《私》ではなく神に従って生きることを可能にさせる。⁽⁴⁴⁾この世界において人間が被造物として存在しているかぎり、人間はつねに無に差し向けられている。この被造物の本性がまさに恩寵を神から無償で (gratis) 受け入れる根拠なのである。⁽⁴⁵⁾したがって、被造物においてはたらく神のすべての行為は恩寵である。⁽⁴⁶⁾そして恩寵は「永遠の生命」として⁽⁴⁷⁾神の存在自体を意味するのであるから、神の《私》が表示する純粋なる実体は人間の《私》を否定させ、本来あるところのもの (id quod sum) を譲与する。人間に本来あるところのものを与えることは、無から存在を与えることである。すなわち創造は神の恩寵として示される。恩寵としての受肉がもたらす救済とはしたがって、被造的存在者としての人間を本来の自己に還帰させることにある。

注 エックハルトのテクストの略号は以下の通りである。

LW; DW: Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff; DW=Deutsche Werke; LW=Lateinische Werke.

In Gen. I: *Expositio libri Genesis* (『創世記註解』) / In Gen. II: *Liber Parabolarum Genesis* (『創世記比喩解』) / In Exod.: *Expositio libri Exodi* (『出エジプト記註解』) / In Sap.: *Expositio Sapientiae* (『知恵書註解』) / In Ecclesi.: *Sermones et lectiones super Ecclesiastici c. 24, 23-31* (『集衆の書第24章23-31節についての説教と講解』) / In Ioh.: *Expositio sancti evangelii secundum Iohannem* (『ヨハネ福音書註解』) / *Serm.: Sermones* (『トクトノ語説教』) / *Pr.: Predigt* (『メニオン語説教』)。

- (1) Pr. 26; DW II, 27, 9-10: “war umbe lebest dâ?”: “triuwen, ich enweiz! ich lebe gerne”.
- (2) Pr. 5b; DW I, 92, 1-3: Daz ist dâ von, wan leben lebt user sinem eigenen grunde und quillet user sinem elgen; dar umbe lebet ez âne warumb in dem, daz ez sich selber lebet.
- (3) Pr. 5a; DW I, 80, 19: waz ist min leben? daz von innen bewegt wirt von im selber.
- (4) In Ioh. n. 585; LW III, 512, 8: actus interior non cadit sub tempore, semper nascitur, non intercitur.

(5) In Ioh. n. 62; LW III, 51, 9-11: Ex quo patet quod proprie non vivit omne, quod habet efficiens ante se et supra se, sive finem extra se vel aliud s se.

(6) In Ioh. n. 62; LW III, 51, 11: Tale est autem omne creatum.

(7) In Sap. n. 24; LW II, 344, 10-345, 1: ipsum factum a deo, quod est quidem in se ipso, in deo vita erat et ut vita increabile, sicut deus ipse increabilis.

(8) In Gen. I n. 77; LW I, 238, 1-6: Nota quod omnis creatura duplex habet esse. Unum in causis suis originalibus, solum in verbo dei; et hoc est esse firmum et stabile. Propter quod scientia corruptibilium est incorruptibilis, firma et stabilis; scitur enim res in suis causis. Aliud est esse rerum extra in rerum natura, quod habent res in forma propria. Primum est esse virtuale, secundum est esse formale, quod plerumque infirmum et variabile.

(9) 『出エジプト記』第30章14節。

(10) In Exod. n. 16; LW II, 21, 10-11.

(11) In Exod. n. 16; LW II, 21, 11-12: in se fervens et in se ipso et in se ipsum liquescens et bulliens.

(12) Serm. XLIX, 3 n. 511, 2-4: vita quaedam, ac si imaginis rem ex se ipsa et in se ipsa intumescere et bullire in se ipsa necdum cointellecta ebullitione.

(13) Thomas de Aquino, *Summa theologiae* I, qu. 3 art. 4.

(14) 第一原因としての神に關してはエックハルトの拙論を参照されたい。

山崎達也「エックハルトにおける創造論—存在はベノ」
まてリアルに語れるか—」(渡邊二郎監修、哲学史研
究会編『西洋哲学史再構築試論』、昭和堂、2007
年、所収)。

- (15) In Ioh. n. 50; LW III, 41, 11-12: Non habet quare, sed ipsum est quare omnium et omnibus.
- (16) Liber xxiv Philosophorum. prop. 1 ed. Baumker, Cl., *BGPMA* XXV/2: 208, 1: deus est monas, monadem gigens, in se suum reflexit ardorem.
- (17) In Gen. II, n. 3; LW I, 454, 1-4: et abinde exemplata et derivata creaturarum productio, et quomodo in omni opere naturam moris et artis elucet pater ingentius, filius a patre solo genitus, amor essentialis concomitans et amor notionalis, spiritus sanctus a patre et filio uno principio spirantus seu procedens.
- (18) In Exod. n. 16; LW II, 22, 7-8: emanatio personarum in divinis ratio est praevia creationis.
- (19) Sem. XXV, 1, n. 258; LW IV, 236, 4-7: Rursus deus sub ratione boni est principium ebullitionis ad extra, sub ratione vero notionis est principium bullitionis in se ipso, quae causaliter et exemplariter ad ebullitione.
- (20) In Ioh. n. 185; LW III, 154, 11-14: dei sapientia sic caro fieri dignata est, ut ipsa incarnatio quasi media inter divinarum personarum processionem et creaturarum productionem utriusque naturam sapiat, ita ut incarnatio ipsa sit

exemplata quidem ab aeterna emanatione et exemplar totius naturae inferioris.

- (21) Pr. 5b; DW I, 90, 3-5: 'got hân gesant sinen einbornen sun in die werlt'; daz sult ir niht verstân vür die üzwendige werlt, al ser mit uns az und trunk: ir sult ez verstân vür die inner werlt.
- (22) Pr. 5b; DW I, 90, 6-8: Als waerliche der vater in siner einvaltigen nature gebirt sinen sun naturliche, als gewaerliche gebirt er in in des geiles imngesiez, und diz ist diu inner werlt.
- (23) Pr. 5b; DW I, 90, 8: Hie ist gotes grunt niñ grunt und niñ grunt gotes grunt.
- (24) Pr. 5b; DW I, 90, 8-9: Hie lebe ich user niñem eigen, als got lebet user sinem eigen.
- (25) Pr. 29; DW II, 89, 6-7: daz ist gotes eigenschaft und sîn nature, daz er ungleich si und niemanne gleich si.
- (26) In Exod. n. 39; LW II, 44, 17-45, 1: comparatio omnis similitude est eorum quae convenient in specie vel saltem in genere. Deus autem, utpote extra genus, cum nullo convenit nec specie nec genere.
- (27) しかしこの「一性」を語るにはこれまでの考察では不十分である。エックハルトはこの一性に关してさまざまな側面からアプローチを試みている。この小論においては、後述するように、「私の根底」という概念のもとに考察を続けることになるが、しかしそれで

も満足できるものではない。このようなことを述べるのは、読者諸兄に対してまことに恐縮のかぎりであるが、筆者の今後の研究成果を期待していただくというかたちで、ご容赦を請う次第である。

(28) Pr. 5b: DW I, 88, 7-8: Ze dem dritten mâte solt du nihes blôz stân.

エックハルトは引きつづき次のように語っている。

『地獄で燃えているものは何か』という問いがよく提出される。師たちはよく我意が燃えていると答えている。しかし私は真理にしたがって地獄で燃えているのは《ない》であると言う。さてここで一つの比喩を用いることにしよう。燃えている炭が私の手の上に置かれたとしよう。このとき、炭が私の手を焼いていると言うならば、私は炭に対して不適切なことを言ったことになるだろう。しかし適切に言うならば、私を焼くもの、それは《ない》である。というのは、私の手が持つていないものを炭はそれ自身のうちに持つているからである。見よ、まさにこの《ない》が私を焼くのである。しかし私の手が炭であるものおよび炭が成し遂げられるものをすべて自分自身のうちに持つていたのであれば、私の手は火の本性を完全に持つていることになるだろう。次いである人がかつて燃えていたすべての火をとり、私の手の上に注ぎ入れたとしても、それは私を痛めることはできないだろう。同様に私は言う、神と見神のなかにいる人々は自分自身のうちに、

神から離れた人々が持つていないものを持つているのであるから、地獄にいる魂たちを苦しめているのは、我意や何らかの火というよりもこの《ない》なのである。と。私はまことに言う、この《ない》が君に付着しているかぎり、君は不完全である。と。このゆえに、完全でありたいのであれば、君たちは《ない》から脱却しなければならない。』

(29) Pr. 29: DW II, 89, 4-5: Dar umbe mouz der mensche getoetet sîn und gar têt sîn und in selben niht sîn.

(30) In Ioh. n. 117: LW III, 101, 12-14: primus fructus incarnationis verbi, quod est filius dei naturaliter, est ut nos simus filii dei per adoptionem.

(31) Pr. 37: DW II, 219, 4-6: Diu geburt engessechet niht eines in dem jâre noch eines in dem mânoîte noch eines in dem tage, mêr: alle zît, daz ist obe zît in der wîfe, dâ noch nû emist, noch nature noch gedanke.

(32) In Ioh. n. 121: LW III, 106, 2.

(33) In Ioh. n. 99: LW III, 85, 2-5: nec entia nec quae unum sunt aut vera et bona, non habent ex se nec quod sunt nec quod unum sunt nec quod vera et bona - et hoc est quod hic dicitur: *sui eum non receperunt* - , sed habent hoc ab ipso verbo, dei filio.

(34) In Eccli. n. 53: LW II, 282, 2-5: Sed omne ens creatum analogatur deo in esse, veritate et bonitate. Igitur omne ens creatum habet a deo et in deo, non in se ipso ente creato,

esse, vivere, sapere positive et radicaliter.

- (35) Pr. 29; DW II, 84, 1-3: War umbe ist got mensche worden? Dar umbe, daz ich got geborn würtle der selbe. Dar umbe ist got gestorben, daz ich sterbe aller der werlt und allen geschaffenen dingem.

- (36) Sem. XXV, 2 n. 264; LW IV, 240, 7: gratia est a solo deo pari ratione sicut et ipsum esse.

- (37) エックハルトにおける受肉論を理解するうえで彼の人間本性論を無視することはできない。エックハルトにおける人間本性論の特徴が見られる資料の一つとして、ドイツ語説教第24から次の文を引用する。

「師たちは、人間本性は時間とは関わりがなく、まったく触れることができず、人間が自己自身であるよりもいっそう内的であり、いっそう自己自身に近い、と言っている。それゆえ神は人間本性を受け入れたのであり、神のペルソナと一となったのである。そこで人間本性は神となった。なぜなら、神が受け入れたのは人間本性であって、人間ではないからである。それゆえ、君が同じキリストに、神になりたいのであれば、永遠なる言葉が受け入れなかったすべてのものを放棄しなさい。永遠なる言葉は人間を受け入れなかった。それゆえ、人間から君に付着しているもの、君であるものを放棄し、人間本性に従って純粹に自己を受け入れなさい。そうすれば、君は永遠なる言葉のうちにある人間本性であるものと同じものなのである。なぜな

ら、君の人間本性と永遠なる言葉の人間本性には、な
んら差異はないからである。それは同一である。なぜ
なら、キリストのうちにある人間本性であるもの、そ
れは君のうちにある人間本性だからである。」(DW I,
420, 1-11)

なお、この引用文の冒頭にある「師たち」の一人と
して、ドイツ語著作の校訂・編集者クイヴィント
(Josef Quint, 1898-1976) はトマス・アクィナスをあげ、
『存在者と本質』(De ente et essentia) 第二章から次の
文を引用している。

「したがって明らかなのは、名称《人間》(homo)と
名称《人間性》(humanitas) が人間の本質(essentia)を
意味していることである。しかしすでに述べたように、
異なった仕方においてである。というのは、名称《人
間》は質料(materia)の表示を除外せず、類(species)
が種差(differentia)を含んでいるとすでに述べたよう
に、質料の表示を暗黙のうちに不明瞭な仕方を含んで
いるかぎり、名称《人間》は全体としての人間の本質
を意味しているからである。したがって、名称《人
間》は個々の人間に述語されるのである。一方、名称
《人間性》は部分としての人間の本質を意味してい
る。というのは、《人間性》はその意味においては、人
間であるかぎりの人間に属するものしか含んでおら
ず、すなわちあらゆる表示を除外しているからである。
したがって、《人間性》は人間の個々については述語さ

れなら。」(Thomas de Aquino, *De ente et essentia*, cap.2)

トマスがこの引用文から判断すると、『人間性』という名称には資料の表示が含まれていない点にエックハルトは注目し、『人間性』が時間的限定を超越しているという理解に基づいて、人間本性論を展開している。

- (38) In Ioh. n. 289; LW III, 241, 7-8: Primo quidem quod natura est nobis omnibus aequaliter communis cum Christo univoce.

- (39) In Ioh. n. 289; LW III, 241, 14-15: Secundo notandum quod natura humana est cuilibet homini intimior qua mille sibi.

- (40) Sermon. XXIX, n. 296; LW IV, 264, 1-3: Deus solus illabitur omnibus entibus, ipsorum essentis. Nihil autem aliorum illabitur alteri. Deus est in intimis cuiuslibet et solum in intimis, et ipse solus unus est.

- (41) In Exod. n. 14; LW II, 20, 3-7: Li ego pronomen est primae personae. Discretivum pronomen meram substantiam significat; meram, inquam, sine omni accidente, sine omni alieno, substantiam sine qualitate, sine forma hoc aut illa, sine hoc aut illo. Haec autem deo et ipsi soli congruent, qui est super accedens, super speciem, super genus. Ipsi, inquam, soli.

- (42) Sermon. XXII n. 213; LW IV, 199, 2: Li ego meram substantiam significat, et nihilominus ipsum oportet abnegare.

- (43) 《私》に関するこのような解釈は、斎藤慶典氏の論文

「愛の不可能性、あるいは倫理」(『思想』989号、岩波書店、2006年9月、26-40頁)で指摘されている享受と自己の関係からヒントを受けている。すなわち、この世界において自己(私)を成立させる画期的な出来事が享受であり、それは現象する世界を統べる根本原理である。そしてエゴイズムが主体としての自己の構成原理であり、したがって自己保存がすべてに優先する絶対的命命(定言命法)である。自己は「存在」の「過剰」としてこの世界に現象する「何か」であるが、エックハルトの場合、『私』は存在それ自体としての神から「噴出」した被造物としての「これこれの存在者」(ens hoc et hoc)として規定される。「これこれのこのような出自からして、『私』は自己の外にあるやはり被造物としての「何か」を求める主体として考えられる。しかし斎藤氏による見解がそのままエックハルト解釈に適用されるわけではない。エックハルトは、神学者的観点から、神の恩寵による『私』の消去を念頭においているからである。

- (44) Sermon. II, 2 n. 16; LW IV, 17, 11-12: Dat enim gratia homini abnegare se ipsum et tollere crucem suam et sequi deum, vivere deo, non sibi.

なおエックハルトによれば、「生きている人たちが、もはや自分自身のために生きているのではない」(ニコリ、5・15)「生きているのは、もはやわたしではありません」(ガラ、2・20)というパウロの言葉

は「徳龍」の「心死を言ふ表」に引く。

- (45) Serm. XXV, 1 n. 259; LW IV, 237, 8-9: Primum autem est ex nihilo, et ante ipsum est nihil, et sic sine merito, sine medio, sine dispositione, et per consequens gratis.
- (46) Serm. XXV, 1 n. 257; LW IV, 235, 2-3: Omne opus dei in creatura est gratia, et solius dei actus sive donum est gratia.
- (47) Serm. II, 2 n. 16; LW IV, 17, 6: Tertio animam vere et perfecte vivificant, cum (gratia) sit vita et vita aeterna.
- Serm. XVII, 6 n. 179; LW IV, 167, 10-168, 4: Ioh. 10: 'ego veni, ut vitam habeant': Nota: grati est vita formaliter: Quid enim tam formale quam vita? 'Vivere viventibus est esse'. Nihil est ipso esse formalius. Hinc est quod vita (dicitur) respicere essentiam, id quod est, non potentiam animae, non opus extra, sed nec intra. In cuius figura Iohannes, 'gratia', id quod est, 'signum nullum fecit', Ioh. 10. Et hoc est quod dicitur Cor. 15: 'gratia dei sum id quod sum' - gratia enim esse respicit - divinum, deiforme, unde gratia subiectum habet ipsam substantiam animae secundum doctores.

(やまのま) たつや／東洋哲学研究所研究員)